



Title	旧醍醐寺蔵如意輪観音半跏像について
Author(s)	町田, 大悟
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 27-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

旧醍醐寺蔵如意輪観音半跏像について

日本東洋美術史 博士前期課程一年

町田 大悟

はじめに

理源大師聖宝（八三二〜九〇九）は、真言密教と南都諸宗の教学を学ぶとともに、奈良時代以来の山林での修行の伝統に身を置き、吉野・金峯山において山岳修行を積極的に行っていた。この聖宝が開いた醍醐寺に伝来した木造如意輪観音像（以下、本像）は、六臂の如意輪観音ながら、胎蔵曼荼羅にあらわされる、両足裏を接し、右膝を立て、左脚を横たえる、いわゆる「輪王坐」ではなく、右足首を左腿に乗せ、左足を垂下させる半跏思惟形に近い坐勢をとる特殊な像容を示している。

本発表では、本像の製作年代を推定するとともに、その特殊な坐勢の図像的な典拠とその造像を主導した僧侶について検討を試みる。

一．作品概要

本像は、像高が九七・一 cm、針葉樹による一木造で、頭部は顎を軽く引いて右に傾け、右第一手は持ち上げた右膝の上に肘をつき、第一・二指を軽く曲げて指先を接し、他指を深く曲げて第二指の外側を頬に当てる思惟手とする。同第二手は側方で数珠を持ち、同第三手は胸前で蓮台付き宝珠を掌の上に乗せる。左第一手は後方で岩座をつかみ、同第二手は屈臂し、側方で指先に輪宝を立て、同第三手は胸前で蓮枝を持つ。左脚を垂下して岩座に腰をおろし、右脚は足の甲を左大腿部半ばに置いて横たえるが、膝頭を持ち上げるのが特徴的である。なお、左第二・三手の肩以下、右第一手の前膊半ばより先、右第二手の手首以下、右第三手の肘より先、右足先を含む左脚膝頭以下、体部の背板は後補とされ、面部に若干彫り直しがあるようである。

二．製作年代の検討

本像の製作年代について、これまで醍醐寺内の諸像との比較を通して検討が行われてきた。井上一穂氏は、本像の細身な身体表現に、延喜十三年（九一三）以前に完成した五大堂大威徳明王像との類似性を認め、その製作年代を十世紀初め頃であったと推定した。その後、水野敬三郎氏は、本像の造形を十世紀後半の製作とみられる霊宝館蔵胎蔵大日如来像や同じく天徳年間（九五七〜九六一）創建の旧千手堂千手観音菩薩像の造形に類似することから、本像の造像年代を十世紀後半と位置づけた²。しかし、近年、杉田

¹ 井上一穂『日本の美術 第312号 如意輪観音像・馬頭観音像』至文堂、一九九二年

² 水野敬三郎「醍醐寺の彫刻 ― 平安時代」『醍醐寺大観 第一巻』岩波書店、二〇〇二年

美沙紀氏は、五大堂大威徳明王像に加え、延喜十三年以前完成の薬師堂薬師如来の脇侍である日光菩薩との比較に基づき、本像の造像年代をやはり十世紀初期に遡ると推定している³⁰。

あらためて本像の様式を検討すると、肩を張り、腰を絞り込む体型や、腹の括り線が腰近くにあらわされる点には、醍醐寺五大堂大威徳明王像や観賢（八五四く九二五）在世中に創建された旧中院五大明王像といった十世紀初期の彫刻との類似性が見いだせる。像の奥行が浅い点や手足が長い点においても、五大堂大威徳明王をはじめとした十世紀初期の諸像と同様の特徴を示している。しかし、十世紀初期の作例に比べると、体部の厚みがさらに減じ、肉取りも平面的に処理されている。この特徴は旧千手堂千手観音菩薩像や胎蔵大日如来像にも通じることから、発表者は本像の製作年代を十世紀初期よりは降り、第二四半期頃とするのが妥当だと考える。

三．本像の図像的典拠

（一）図像的典拠

本像の図像の典拠については、井上氏が、本像の造形に関して、四天王寺金堂本尊像をはじめとした二臂半跏形の観音菩薩の姿が六臂の如意輪観音にまで及んだという可能性を紹介しており⁴、清水紀枝氏も、本像の造形が二臂半跏形の観音菩薩像が如意輪観音とみなされることに関係する可能性を指摘している⁵。加えて、石川知彦氏は、靈山に如意輪観音が安置されるに当たって、半跏形の石山寺本尊観音菩薩像の姿を融合させた可能性を指摘した⁶。一方、杉田氏は、六臂の如意輪観音と七世紀の半跏形の菩薩像の坐勢が複合されたものであったとした⁷。

井上氏や清水氏が典拠として提示した四天王寺金堂本像系の図像では、右手は五指を伸ばして顔の側に置く思惟手、あるいは屈臂し胸前で掌を正面に向ける施無畏印の形を取る。しかしながら、本像の思惟手は、前膊半ばより先が後補ではあるものの、他の当初の手の長さから推してほぼ現状の位置（右肩の前方）に手首があつたとみてよく、だとすれば、当初から手首を内側に屈して指先を右頬に向けていたと考えられる。したがって、思惟手の典拠を四天王寺系の二臂如意輪観音に求めることはできない。また、胎蔵曼荼羅の図像や大阪・観心寺像をはじめとした六臂の如意輪観音像の思惟手は、五指

³⁰ 杉田美沙紀「醍醐寺木造如意輪観音半跏像と十世紀前半の彫刻」『密教図像 第三七号』

密教図像学会、二〇一八年

⁴ 前掲註1参照。

⁵ 清水紀枝「院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰」、早稲田大学文学博士論文、二〇一二年

⁶ 石川知彦「大峯山で祀られた尊像―如意輪観音三尊像をめぐる―」『山岳修験 第五二号』日本山岳修験学会、二〇一三年

⁷ 前掲註3参照。

を伸ばし、掌を頬近くに配しているが、本像の思惟手がこれらの図像とも異なる特徴を有していることは留意すべきである。石川氏は、本像の半跏形の図像の源泉として石山寺本尊像の存在に着目された。しかし、石山寺像は左脚を垂下させる点は本像と共通するものの、右脚を真横に横たえ、しかも右足は先を左大腿部に乗せる半跏坐ではない点に大きな相違があり、石山寺本尊像の図像との関連についても検討を要すると思われる。

本像の半跏形については、杉田氏の指摘のとおり、むしろ飛鳥・奈良時代に流行した半跏思惟像に典拠を求めるべきであろう。そして、そうした半跏思惟像の諸作例を見渡すと、法隆寺献納宝物中の菩薩半跏像（二162）などのように、右膝をやや持ち上げ、右肘をその上に突いて思惟手とし、かつ手首を内に屈し、指先を頬に当てる作例が存在することが注目される。すなわち、本像は半跏形だけでなく、思惟手についても半跏思惟像にならっている可能性があると考えられる。醍醐寺には、旧清瀧宮如意輪観音像のように、五指を伸ばして頬に添える現図胎藏曼荼羅タイプの思惟手とは異なり、第一・二・三指を軽く曲げ、第四・五指を深く曲げて第二指の外側を頬に当てる形が、真言密教の根本経典の一つである『大毗盧遮那成佛神変加持经』の注釈書、『大毘盧遮那成佛经疏』中に「思惟手謂稍屈地水指向掌、餘三指散舒三奇杖稍側頭、屈手向裏。以頭指指頬」と説かれるのと合致することが津田徹英氏によって指摘されている⁸。本像の現状の思惟手は、これに近いものであるが、一方ではこの記述が、飛鳥・奈良時代の半跏思惟像にみられる第一・二・三指を伸ばし、第四・五指を屈する思惟手にも通じること注目したい。というのも、そうした半跏思惟像の思惟手の形を介して、醍醐寺内で半跏思惟像を二臂の如意輪観音とする認識が生じていた可能性があるからである。本像に半跏形が採用された理由、あるいは密教的な六臂の如意輪観音に半跏思惟像の姿が援用された背景には、そうした認識があつたのではないだろうか。

②造像を指導した僧侶

先行研究では、清水氏が醍醐寺僧であつた淳祐（八九〇～九五三）の石山寺入山を契機として、石山寺本尊が如意輪観音と呼称されるようになった可能性を指摘するとともに、本像の造像への淳祐の関与を想定した⁹。

淳祐は醍醐寺において観賢に学んだ後、石山寺に隠棲し、経典の書写などに注力したことが知られる。石山寺に伝わる六臂輪王坐の如意輪観音像は、胎藏曼荼羅に基づくものであるが、井上氏によれば淳祐の法流による造像であるという¹⁰。淳祐の師であつた

⁸ 津田徹英「醍醐寺如意輪観音像考」『平安密教彫刻論』、中央公論美術出版、二〇一六年

⁹ 前掲註5参照。

¹⁰ 井上一穂「新出・石山寺木造如意輪観音坐像をめぐって」、『博物館学年報第三五号』、同志社大学博物館学芸員課程、二〇〇三年

観賢は儀軌を固守する傾向が認められることが指摘されており¹¹、石山寺像が胎蔵曼荼羅に忠実なのはそうした観賢の態度が淳祐にも継承されていたことを想定させる。しかし、そうした淳祐の志向は、半跏思惟像との融合を試みた本像の特異な図像形成とは相容れないように思われる。

そこで、本像の図像形成に関与した人物を想定するならば、十世紀の醍醐寺において如意輪信仰を重視した人物として、新たに貞崇（八六四～九四三）の存在が注目される。貞崇は、貞観六年（八六四）、三善氏の生まれで、貞観寺の恵宿のもとで密教を学び、昌泰二年（八九九）より金峯山に籠もった。その後、延喜二年（九〇二）に聖宝から伝法灌頂を受けてからは三論の教えも修めた。延長五年（九二七）に都に出てからは、朝廷との関わりを持ち、延長八年（九三〇）に醍醐寺座主に補任され、天慶六年（九四三）に入寂するまで座主を務め、同年に入寂した。貞崇は自身が醍醐寺座主に補任された際に、醍醐寺に国家が認めた学僧である年分度者として新たに三論宗僧侶を受け入れている¹²。このように、貞崇は南都との関わりが深かったことが知られ、貞崇は観賢や淳祐とは異なった価値観を有していたと考えられる。また、貞崇の師であつた聖宝は、醍醐寺薬師堂薬師如来像の着衣の造形に、九世紀前半の製作と考えられている奈良・新薬師寺薬師如来像のような先行する作例の意匠を取り入れていたことが知られ¹³、半跏思惟像を如意輪観音と認識したのも、貞崇が聖宝のように、先行する図像として半跏思惟像の姿を援用し、胎蔵曼荼羅由来の六臂如意輪観音の造形と複合したと考えられる。

おわりに

本発表では、先行研究から本像の製作年代および図像的特徴についての考察を行い、本像の造像年代が十世紀第二四半期に降り、特殊な坐勢には指先を頬に当てる思惟手を持つ半跏思惟像の影響があつた可能性を提示した。また、本像の製作に関わつた僧侶についても、これまで考えられてきた淳祐ではなく、南都と関わりの深かつた貞崇が関与した可能性を示した。

本像に関しては、六臂と二臂半跏形の如意輪観音を複合することによつたどのような意味があつたのか、そして当初の安置場所など未だにわからない部分も多く、これらの検討を今後の課題としたい。

¹¹ 前掲註8参照。

¹² 『醍醐雑事記』承平元年六月三日条に、「太政官符治部省、応置醍醐寺年分度者二人事、三論宗一人、（中略）右彼寺座主十禅師傳燈大法師位貞崇奏状」の記述がみられる。

¹³ 『醍醐寺大観 第一巻』作品解説、岩波書店、二〇〇二年